



愛に基礎づけられた伝道 慈しみに満ちた信仰共同体の形成

『あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。』 マタイによる福音書 5 章 16 節

◇ 牧師からのメッセージ ◇

「共に学ぼう」 クリスマンにとって信仰について学び続けることは大切です。身体が運動を必要とするように、信仰も学びを怠ると枯渇していきます。◆教会の歴史は、スモール・グループでの学びが特に重要であることを証しています。パウロが打ち建てた教会のほとんどは、ハウス・チャーチと呼ばれるものでした。礼拝の他に、5 人から 10 人位の人々が集まって、キリストの福音を巡って共に学びと交わりの時を持ったことが、パウロの書簡や、使徒行伝から伺われます。メソジスト教会の基盤を造ったジョン・ウェスレーは、伝道を通してスモール・グループにおける学びを強調したことで知られています。メソジストという名前には、スモール・グループでの学びを「クリスマン育成の方法」(メソッド)として使うことに熱心であったという意味が込められています。◆スモール・グループには幾つかの重要な利点があります。例えば、そこでは自分の考えや思いを忌憚なく語ることができます。自分の存在がグループにとって重要であり、必要であることを自覚できます。他者の意見に耳を傾ける意欲が出てきます。また、他のメンバーを、信仰を共にする友人と感じる連帯感を持つことができます。◆日米合同教会の理事会は、この 9 月から、いくつかの学びを目的としたスモール・グループを支援することにしました。月に一回のグループもあるでしょうし、毎週集まるグループもあるかもしれません。集まる場所は教会でも良し、家庭集会の形を取るのも結構です。リーダーとなるボランティアも募ります。トピックは聖書の学び、祈り会、人間関係やコミュニケーション、クリスマン・ホームの形成等、それぞれのグループが自由にお決めください。参考になるキリスト教関係の本やパンフレット等はインターネットで調べることができます。◆勿論、現在の段階ではっきりしない点がいろいろあります。しかし、力を会わせてそれらを少しずつ解消していく過程は、学びにとって重要です。日米合同教会の牧師として、私もスモール・グループの立ち上げに協力したい

と思います。月に一度、土曜日に牧師館を開放して、キリスト教の立場から「進化論と聖書は両立するか?」、「キリスト教と戦争」、「キリスト教の職業観」等のテーマを巡って、関心のある方々と一緒に考える時を持ちたいと考えています。スモール・グループの集いが実りあるものになるように願っています。

◇ 教会礼拝説教 ◇

■6月8日「**収税人は立ち上がり、イエスに従った**」マタイ福音書 9:9-13 収税人は主イエスの時代のパレスチナでは人々から最も嫌われた存在でした。彼等はローマ政府の手先となり、自分の民から税金を取り立て富を蓄え裕福な暮らしをしていたのです。主イエスが収税人マタイに近づき弟子になるように招いたのを見て人々がショックを受けたのは当然でした。聖書は、主イエスの「私に従いなさい」という言葉に答えてマタイは立ち上がりその後を一途に追ったと記しています。そしてその後、主イエスはマタイの家で他の収税人や汚れた人々と一緒に愉快地食事をしたのです。◆当時そのような行為は社会のしきたりに反するばかりか、律法によっても禁じられていました。収税人と食事することは聖なる神に対する冒瀆行為だったのです。「何故あなたは収税人や罪人達と食事をするのか」とイエスに迫ったファリサイ派の人々にイエスは答えます。「健康な人に医者はいらない。病气の人にこそ医者は必要だ。私は正しい者のためにではなく、罪人のために来たのだ。」◆自分が正しい、神に一番近いと自負していたファリサイ派の人達は赦される必要を感じていませんでした。従って実際には神から最も遠い所にいる存在だったのです。一方収税人は自分たちが罪人であり赦しを必要としていることを知っていました。ですから主イエスは彼らに近寄り助けることができたのです。イエスに招かれマタイは 180 度の方向転換をしました。それは邸宅に住むことや贅沢な食事をするからも手を引くという具体的な行為に繋がるものでした。しかしマタイは彼が失ったものとは比べ物にならない素晴らしい贈り物を頂いたのです。それは人間らしい生き甲斐のある人生を生きるという道でした。◆18 世紀半ばのイギリスにジョン・ニュートンという人がいました。彼は奴隷売買によって富を得た富豪でした。しかし彼の心はそのうち深い罪責感を抱くようになります。彼は自分の罪深さに絶望しますがその極みの只中で主イエスのマタイに対する言葉を思い出します。「立ち上がり、私に従いなさい。」彼は主イエスに従う決心をし、その後奴隷制撤廃のために身を粉にして働くことになりました。その時の決心を詩に託したものが「アメージング・グレース」です。「くすしきみ恵み我を救い、迷いしこの身も立ち帰りぬ。」主イエスは今私達一人一人に近づき「立ち上がり、私に従いなさい」と呼びかけておられます。

■6月15日「**12 弟子はどのような人達だったのか**」マタイ福音書 10:1-15 主イエスの 12 人の直弟子の中でマタイは収税人、そしてシモンは熱心党という政治結社のメンバーでした。収税人はローマの傀儡政権にやとわれ税金を取り立てる、植民地政策のお先棒かつぎであり、熱心党はイスラエルをローマ支配から武力で解放しようともくろむ革命団体でした。普通の状況だったなら熱心党のシモンは収税人のマタイを短刀で刺し殺していたことでしょう。しかし主イエスはこの二人を自分のグループに招き入れました。その上、彼等に「神の国は近づいた」と人々に知らせなさいと命じられたのです。◆これは当時経済的、宗教的、政治的に搾取されていた当時のパレスチナのユダヤ人にとっては不可解なこと

日米合同教会では下記のスモール・グループが 9 月からスタートします。ご自分のニーズにあったスモール・グループの 1 つに所属し、同じメンバーで共に学び、祈り、交わりを通して、お互いに霊的成長をしていきます。

1. 英語教材での女性の学び会 (バイリンガル) 毎土曜日 2-4 時 園田姉宅
2. 幼児を持つ母親中心の学び会 第 2 火曜日午後 12-3 時 時田姉宅
3. 日本語教材での学び会 日程、場所未定
4. 男性信徒のための会 日程、場所未定



教会ミニストリー報告

でした。貧困の上にローマ帝国からの重税があり、文化的、宗教的にはローマ人から蔑まれており、政治的にはローマの植民地支配下にありました。加えて宗教指導者達は自己保身に汲々として、一般民の窮状には無関心を決め込む有様でした。この状況下では「神の国は近づいた」のではなく、神の国は遥かに遠い所にあるということになる筈です。◆ここで主イエスの言う「神の国」とは、神の支配が社会のすべての領域に完全に行き渡っている状態、神の愛と憐れみによって覆われている状態です。言い換えれば、神の思いに適う人間の理想的共同体こそが神の国なのです。収税人マタイと熱心党のシモンと一緒に食卓を囲み、漁師の若者がそれに加わるという、和解と連帯の具体像を私達はそこに見て取ることができます。この人間の理想的共同体としての「神の国」は、主イエスにおいて完全な形で現れ、弟子達の間には不完全ではありながら目に見える形で現れ、その意味でまさしく「神の国は近づいた」のです。◆現在主イエスは弟子達に与えたのと同じ責任を私たちに託しておられます。私たちに「神の国」を人々に見える形で示す責任が与えられているのです。私たちの日米合同教会は「神の国の前触れ」となるように招かれています。それは重荷ではなく、主イエスに招かれた者に与えられた喜びに満ちた特権であります。

■6月22日「クリスチャンは何故礼拝するのですか」詩篇 100:1-5

クリスチャンにとって礼拝はなくてはならないものです。礼拝に与らないでいると私達の信仰はいつの間にか頭だけの抽象的な教えになってしまい、生き生きとしたバイタリティーを失ってしまいます。◆礼拝は呼吸に似ています。肺に空気を吸い込まなければ私達は死んでしまいます。礼拝なくしては肉体は存在しても信仰者として生きて行くことはできません。神を讃美しなければ、クリスチャンの魂は何ヶ月も雨の振らない土の中に埋もれた草花のように枯渇してしまいます。礼拝とは信仰を同じくする人々と一緒に神様に対して「有り難うございます」と深々と頭を垂れることです。詩編の詩人は「神に喜びの叫びを上げよう」と勧めています。「感謝の歌をうたって主の門に進み、讃美の歌をうたって主の道に入れ。」この詩人にとって神への感謝はイスラエルの過去の思い出に基礎付けられていました。◆出エジプトを例にとると、神は奴隷だったヘブライの民を解放しようと望まれ、モーセを指導者に任命し、紅海では追跡してきたパロの騎馬隊から民を救い、砂漠を彷徨した時にはマナやうずらなどの食物を与えます。しかしそのような恵みにも関わらず、ヘブライの民は敵を前にした時にはおじまどい、こんなことならエジプトに奴隷でいた方が良かったと不平を言い、40年の砂漠での彷徨ではシナイ山の麓で金の子牛の偶像に礼拝をささげる始末でした。それでも神はその民を見捨てることはなさらなかった、そのことを思う時どうして私達は神に感謝せずにおられよう、礼拝せずにおられよう。そう詩編の詩人は訴えているのです。◆私達は詩人と同じ思い出を共有しています。しかし私達はそれ以上に大切な思い出を持っているのです。それはイエス・キリストの思い出です。私達の世界は何の罪もない市民が殺害され、幼子が見捨てられ、自然災害によって肉親や家屋を失う世界です。家族の間でさえ疎外や葛藤を回避することのできない世界です。主イエスはその世界の



ために十字架にかかれたのです。それは神が私達の苦しみや痛みを背負い、私達のくびきを負っておられることまごうことなき証しです。神はイエス・キリストにおいて世界のすべての苦しみをご自分のこととして体験しておられるのです。礼拝は枯れ果てたようになった私達の魂そして信仰が、感謝の思いとともに、水を得た炎天下の花のように神の恵みと慈しみを受けて生き返ることを意味しています。

■6月29日「隣人とは誰のことか？」ルカ福音書 10:25-37

日米合同教会では自然災害で大きな被害を被ったミャンマーや中国の人々のために献金を募っています。この活動はイエス・キリストの福音に深く根を張っています。「善きサマリア人の譬え」を思い出してみましょう。主イエスと敵対する律法と呼ばれる宗教的戒律の専門家が、「私の隣人とは誰のことか。」とイエスに向かって挑戦的な質問をします。民族や宗教という枠組みの中でしか隣人という概念は意味を持たなかったこの人物にとって、隣人とは民族を同じくモーセの戒律を守る人、つまり自分と同じユダヤ人のことでした。◆しかし主イエスは隣人の定義をこの譬えの中に示されています。道端に半死半生で倒れているユダヤ人の旅人がいました。そこにまずユダヤ人の祭司、続いて祭司になるための訓練を受けているレビ人が通りかかりますが彼らはそれぞれ旅人を見捨ててその場を去っていきます。三番目に通りかかったのがサマリア人でした。サマリア人は当時ユダヤ人から忌み嫌われていたいわば被差別部落の住人でした。このサマリア人は倒れている旅人を見ると可愛そうに思って近づき傷の手当をし、自分のロバに乗せて宿屋に連れて行き宿屋の主人にお金を出して介抱を頼みます。主イエスは戸惑う律法の専門家に問いかけます。「誰がこの旅人の隣人になったと思うか。」彼は仕方なく答えます。「旅人を介抱した人です。」主イエスは彼に向かって言います。「行って同じようにしなさい。」◆旅人とサマリア人の中には民族、宗教、文化と差別意識という隔ての壁が立っていました。それにも関わらずサマリア人はユダヤ人の旅人に近寄っていきます。この「近寄って行く」という言葉には、隔ての壁を内側から切り崩していく、という深い象徴的意味が込められています。サマリア人は旅人が一番必要としているものを何のてらいもなく差し出し彼の隣人となったのです。彼の重荷を背負い、彼の痛みを自分の痛みとして感じ、人間として連帯したのです。◆この連帯と憐れみの行為は単なる慈善ではありません。何故ならマタイによる福音書は主イエスの次のような言葉を記しています。「飢えている人を食べさせ、のどが乾いた人に飲ませ、旅をしている人に宿を貸し、裸の人に着せ、病气の人を見舞い、獄に繋がれている人を訪ねることは、私にしたことなのだ。」隔ての壁を切り崩して相手に近づき隣人となれという主イエスの招きに、喜び勇んで従おうではありませんか。

◇ 洗礼 ◇

7月20日、寺田涼子姉(写真中央)は小林かおる姉立会いのもと受洗され、当教会員になりました。同姉は約1年の間、礼拝出席を欠かさず、教会行事での奉仕をされる中で、着実に求道されていました。いつもは控えめな同姉ではありますが、イエス様の話、救いについての話には、意欲的に聞き入る姿がいつ



教会ミニストーリー報告

もありました。今、日本に一時帰国されていますが、ニューヨークに戻られるときに、受洗に至る証しを語っていただきたいと思えます。

◇ 私の証し ◇

「そのままの自分を受け入れられ、愛されることを知って」クインタナ晴帆姉記 私は家庭にも友人にも恵まれ、特に不自由なくのびのび育ちました。心の中では学生当時からいろいろな事で劣等感を持つことがありましたが、特にキリスト教に関心を持つこともありませんでした。大卒後インテリアの仕事に就き、その後アメリカに留学。そんな中 1993 年頃、母校の同志社女子部の出身者であり当事婦人会におられた此川(このかわ)アサエさんに誘われて JAUC に行くようになりました。最初は信仰にはあまり興味はなく、いろいろな方とお話することや、教会図書の本などが目的で教会に来ていました。◆ある時学校で、マリファナ入りの菓子を持ち込んだ人がいて、それを食べた一人が救急車で運ばれる騒ぎが起きました。このことを「別にいいじゃないか」と言う人もいる中、あるクリスチャンの人がマリファナは悪いものだと言いました。法律以外の善悪の基準というものを持っていなかった私は、このクリスチャンたちの価値基準に興味を持ちました。◆程なくしてある集会で「神様は人間を良いものとして創って下さったにもかかわらず、罪が入って来たので神様と人の間に壁が出来てしまった。しかし神様がみ子イエス・キリストを送って下さり、私達の罪のために死んで復活して下さったのでその壁は崩され、人間は救われることが出来るようになった。」という話を聞き、そうした信仰を持ちたいと思うようになりました。それでも私は神様を信じる事ができず、当時牧師をされていた岩淵先生に話をしたところ「聖書を読んで祈りなさい」と言われました。聖書を読み祈り始めて 3 日目の朝、不思議なことに神様を信じられるようになったのです。その時救いは神様から与えられるものなのだと分かり、次のイースターに洗礼を受けました。◆洗礼後自分の罪や自己中心の思いを聖書に示され恐ろしさと悲しさを感じると同時に、こんな私のためにイエス様が命を捨てて下さったのだと十字架の意味が分かり、嬉し涙がわきました。またそれまで劣等感を自分の力で覆い隠そうとして来たのですが、神様はどんな私でも受け入れてくださると分かり、ポジティブになることができました。◆クリスチャンにも必ず試練がありますが、それを通じて成長します。神様に導かれた時にクリスチャンの主人と知り合い結婚しましたが、後に色々な考え方の違いで大変で、愛は忍耐だと身にしみて分かりました。しかし「耐えられない試練は与えられない」(第一コリント 10:13)という御言葉が支えになっています。また兄弟姉妹たちの愛にも支えられています。

◇ 主のもとへ(召天) ◇

■去る 7 月 7 日、長年の JAUC 会員ホワイト光枝姉はイザベラ・ハウスで天に召されました。御年 87 歳でした。同姉は高齢者施設に移転されてから、再び JAUC のイザベラ聖餐礼拝式で礼拝を守られるようになりました。「**ホワイト姉の思い出**」今戸ちづこ姉記 ホワイト光枝姉とは、2005 年の夏に田中友樹子姉が紹介して下さってからのお付き合いでした。お住まいにお伺いするととても喜んでくださるのがうれしく、またちようど大学の夏休みで時間の余裕もあり、その夏は、多くの時間を一緒に過ごし、お互いの身の上話を花を咲かせました。私の知らない時代の日本やアメリカの話、特に新聞記者をされていたご主人と体験した小説に

もなりそうな海外での話の数々はとても興味深く聞かせていただきました。就職してからは、あまりお会いできず、最後にお会いしたのは今年のイースターの前日、光枝さんのお誕生日の前日でした。その時に、「月に一度 JAUC から鈴木先生ご夫妻、兄弟姉妹が礼拝・聖餐式のために訪ねて下さるのは本当に感謝なこと、みなさんによろしくね」と言われていたのを思い出します。主にあっての交わりに感謝します。

■去る 7 月 16 日、長年の JAUC 会員で画家であられた**向井(大越)ユーヅニア姉**はイザベラ・ハウスで平安のうちに天に召されました。私たちの信仰の先輩は文字通り「平安のうちに」この世を去り、主の懐でお永遠の命を喜んで生きておられるのだらうと思わされてなりません。7 月のイザベラ礼拝で伺ったとき、ご主人の向井ジョージ兄はこのようにおっしゃっていました。「ユーヅニアは食べ物をほとんど口にしないし、そんなに長く生きられないだらう。でも、彼女には信仰があるから、(近い将来訪れるであろう)自分の死に対して恐れた様子もなく、むしろ受け入れているようだ」と。私たちは再びユーヅニア姉の病室を訪れ、挨拶を交わし、共に祈るときをもちました。病床での彼女はひとりひとりにそのまなざしをしっかりと向けて、時折笑いながら会話を楽しまれていました。その様子からも余生を穏やかに過ごされていることが垣間見られました。最後に鈴木先生が祈られる中で、主に身を委ねたユーヅニア姉を囲んで心静かに 1 つとなって祈れたことは私たちひとりひとりにとって喜びであり、印象深い霊的経験となりました。それから 1 週間ほど後、彼女は 87 歳のご生涯を終えて、主のもとへ帰られました。

■JAUC 会員山口一雄兄の愛妹**山本すみ子さん**が御年 87 歳で天に召されました。すみさんは長年の JAUC 会友であられ、ロングアイランド市にお住まいでした。追悼式は 8 月 2 日にセルデン・メモリアル・ホームで執り行われ、当教会は山本家の方々にお悔やみの言葉とお花をお送りしました。

◇ 牧師からのお知らせ ◇

■**日曜日聖書の学び会** 鈴木牧師による 9 月の日本語の聖書の学びは、パウロの書簡、特に「ローマの信徒への手紙」を中心に学んでいく予定です。毎日曜日午後 1 時より 1 時間、3 階。

■**求道者の会**は毎日曜日午後 2 時より 1 時間、4 階牧師室にて行われます。興味のある方はお気軽にご参加ください。

◇ 教会事務所からのお知らせ ◇

■**笹森建美先生の訪問** 当教会の姉妹教会である駒場エデン教会の笹森建美先生ご夫妻が 8 月 10 日に JAUC を訪問され、礼拝をご一緒されました。夕方には教会で先生を囲んで小さな集いが持たれ、リチャード松隈ご夫妻も参加して下さいました。先生は翌 11 日にイザベラ・ハウスを訪問され、コネチカット州にてポールセンキン子姉の墓参りされました。

■**追悼礼拝式** 去る 7 月 22 日、ホワイト光枝姉と向井ユーヅニア姉の合同追悼式が、イザベラ・ハウスにて行われました。鈴木先生が司式を勤められ、おおよそ 100 名の人々が参列しました。当教会では、別途ホワイト光枝姉の追悼礼拝式を 9 月 21 日(日)午後 2 時より執り行う予定です。



■夏の映画上映会報告 JAUC ではこの夏、伝道を目的として 3 回にわたり映画上映会を催しました。第 1 回目の会は 7 月 11 日に開催、「タイタンズを忘れない」を上映し約 30 人が出席しました。第 2 回は 7 月 25 日、映画は「この森で、天使はバスを降りた」で約 25 人が出席、第 3 回は 8 月 8 日に開かれ、「ミス・ポター」を上映して 22 人ほどが参加しました。このうち、初めて JAUC に来られた方は合計 20 人ほどです。来場者には教会のパンフレット、教会活動スケジュール、アルファコースの案内などをお渡ししました。リフレッシュメントの準備など、お手伝いをして下さった方々に感謝いたします。

理事会

■中国とミャンマー被災者の支援 7、8 月の月報で報告した通り、理事会は中国大地震及びミャンマー・サイクロンの被災地への支援ミッションを承認しました。教会予算及び皆さんからの特別献金をあわせて合同メソジスト教団の被災救済委員会 (UMCOR) に寄与することを決定。

■優先項目ーリーダーシップ育成 理事会では、毎回 20~30 分程度リーダーシップに関しての話し合いを持ち始めました。リーダーシップに焦点を当てた文章を聖書やさまざまな文献から引用していきます。これによって理事会員ひとりひとりがリーダーシップとしての賜物を再発見し、その役割を奨励、更には将来の指導者育成の種をまくきっかけになることを期待しています。

■優先項目ースモール・グループ 9 月から JAUC ではスモール・グループでの学び会を奨励、開始する予定です。詳細は『牧師からのメッセージ』をご参照。

■音楽療法プログラム 理事会は、自閉症などの子供たちへの音楽療法プログラム (Nordoff-Robbins Center For Music Therapy) による教会スペースの使用を承認。9 月から同教会でのプログラム開始予定。スペース使用の詳細については、現在理事会と同プログラムとの間で取り決め中。

■ゲスト説教者 理事会は 9 月 7 日日曜礼拝にゲスト説教者として日本大阪にある浜寺聖書教会副牧師を務める近藤修司牧師を迎えることを承認。

牧師招聘委員会

『牧師招聘プロセス進捗報告』月報編集員記 牧師招聘委員会は毎月会衆会を開き、私たち教会員がどのような姿勢で新任牧師をお迎えし、その先生のもと信仰生活を歩むべきかを共に学び、確認しています。◆8 月会合では、新任牧師の候補者探しに先立ち、牧会活動の優先順位を確認しております。JAUC の教会目的 (内側に向かう方向、外側に向かう方向) がそのようなように、牧師の責務もまた教会内部に向けての活動と教会外部に向かう活動に分けることが出来ます。内部に向けての責務は、(1) 礼拝、(2) 交わり、(3) 学び、(4) 奉仕、(5) 弟子訓練の 5 つが挙げられます。外部に向けての責務は、(1) 宣教 [教会外に開かれた勉強会、災害援助活動などを含む]、(2) 伝道の 2 つです。牧師はこれらの活動を責任をもって指導しますが、全ての活動を牧師一人でごなすには限界もあります。このため、信徒がこれら教会活動の優先順位とその目的をよく理解し、牧師の活動を支えて行くことが大切になります。◆なお、「弟子訓練」という言葉に聞きなれない方もおられるかと思ひます。一般的には信徒の霊的成長過程全般に亘って行われる訓練をさすことありますが、

JAUC での弟子訓練とは、特に信徒が教会のリーダーとして成長し、豊かな信仰をもって神様に仕えることが出来るよう指導・教育することを意味します。「Discipleship」という語の訳語として日本の教会でも定着しつつあります。具体的に指導がどのような形をとるか教会・牧師によって異なります。◆7 月 27 日の PCC・会衆合同集会では、この牧会活動の優先順位について会衆一同に意見を出し合っていました。その際、「鈴木先生のような良い先生の後任を果たすことは大変なことなので、後任の先生に無理がかからないよう、私たちもサポートする準備を十分整えるべきだ」「信徒が牧師をサポートすると言うが、牧師にしか出来ないこともあるので、何でも信徒が自分たちで出来るように思っている結果的に牧師の責務を軽視することにつながらないか」「それでは、信徒がどの程度まで成長することを望むか考えなくてはならない」などの率直な意見が出されました。◆なお、「鈴木先生がまだおられるのに後任の話を進めるのは、失礼にならないか」という意見がたびたび寄せられています。気持ちとしてもっとな懸念ですが、後任の候補者を真剣に探すことは鈴木先生ご自身の意向です。◆次回の PCC・会衆合同委員会の集会は 10 月 12、26 日の予定です。

日程	詳細
2006/12	アンケート調査開始
2007/1	アンケート調査回収
2008/1	アンケート調査の結果要約報告
2008/2	第 1 回会衆会合 - 教会 5 年ビジョン
2008/3	第 2 回会合 - 牧師が全てできない
2008/4	第 3 回会合 - 皆がミニスター
2008/5	第 4 回会合 - 教会の目的
2008/7	第 5 回会合 - 牧師の責務 1 教団との初期接触
2008/8	第 6 回会合 - 牧師の責務 2
2008/10	第 7 回会合 - 教会員構成、統計
2008/10	第 8 回会合 - おさらい
2008/12	両教団に必要書類提出 牧師招聘のための教団プロセス決定
2009/1	牧師招聘手続き開始

